

推し活おおたけ

このまち好きじゃけえ

よその人からよく言われるのが「大竹って山口じゃないん」という言葉。「いえいえ広島県ですよ(笑)」。広島市役所から大竹市役所まで約33km、東広島市西条とほぼ同じ。山陽本線の広島～玖波間は39分、広島～西条間も39分です。なのに、大竹のことはあまりよく知らないという広島県民。多くの県民にとって、宮島あたりまでは訪れる機会が多く、そこから先はよく分からない。「知らないまちは遠いまち」そんな声が聞こえてくるようです。自分のまちを自慢するのは、ちょっと恥ずかしい。だけど、大竹のまちを愛し、推してくれている人たちがいます。大竹のまちにエールを送り、このまちの魅力をアピールしてくれる人たちを紹介してみましょう。

【取材 企画財政課】

『人生はショータイム』。日向カンナさんが上京して舞台を踏んだミュージカルです。

「タイトルが私の人生を表しているようにでした」。カンナさんの声のトーンが上がります。

3歳からのダンス人生

昨年、9月に『大好き大竹応援大使』に就任した、大竹市出身でダンサー・振付師として活躍している日向カンナさん。彼女のダンス人生のスタートは、3歳のときだったといえます。6歳上の姉の踊る姿に憧れ、当時の『大竹ジャズダンス同好会』に入会しました。そこには同じく応援大使に就任している先輩の三宅由利子さんも在籍していたそうです。

「4～5歳のときには、ほかの子の立ち位置なんかも全部覚えていました。自分は大人だ、みたいな気持ちがあったんです(笑)」。

サントピア大竹で催された『ふれあい健康福祉まつり』が初舞台だったと記憶の糸をたどります。

「赤い衣装を着てカメラを意識していました。誰よりもかわいく写ろうとしていたんです。そんなステージデビューだったそうです」。

大学に入る前までは、そこで経験を積み、その後広島島のダンススタジオに通い、レッスンや大きな舞台で

力を付けていくことになったと思います。

東京で挑戦したい

東京に出ることになったきっかけは、実家の居酒屋でアルバイトをしていたときに、芸能事務所の人に声をかけられたことでした。

「いろいろと話をしていたら、東京でやりませんかみたいな話になって。正直私は怪しいと思ったので、親と話をしてほしいと言ったら、ほぼ即決のような感じでした。私も恐れ知らずだったというか、むしろ挑戦してみたいという気持ちが強かったみたいです」。

人生はショータイム！

みんなと一緒に踊りたい。

日向カンナさん

(34歳 タレント・ダンサー・振付師)

東京では演技の指導を受け、デビューはダンスではなく芝居でした。やがて『人生はショータイム』に出演。それからオーディションを受け続け実績を積んでいきます。舞台中心の活動からCMの仕事も増えていきました。

「打率がいいって言ったら変ですが、オーディションを受けたら受かるみたいな感じでした。よく覚えてるのが役所広司さんが出ていたハウスメーカーのCM。役所さんの後ろで踊っていました。ほかにも宅配ピザのミュージカルみたいなCMです。親も喜んでいました」。

バラエティ番組にも幅を広げ、『アメトーク！』の人気コーナー『踊りたくない芸人』のダンスの先生として出演。

「名前が出ていく訳じゃないけど、やっぱり一番反響がすごくて。私も身構えずに出ていたんですけど、気づいたらもう6年になりました」。

そのほかにも、アイドルの振り付けも数多く手がける中、いつか自分がブランドになるような振り付けができればと意欲をのぞかせます。

大竹の魅力を発信

東京で活動を続けるカンナさんですが、ふるさと愛は強く地元衣料品店が長年のお気に入り。応援大使としては、西国街道や下瀬美術館、

市内各地で撮影し、SNSなどで大竹の魅力を発信してくれています。昨年の『コイ♥こいフェスティバル』でも、子どもたちと一緒に踊ったりしました。

「これまでも、幼稚園や学校、高齢者施設などに呼んでいただき、一緒に踊ったりしたこともあったのですが、コロナが落ち着いたので再開したいなと思っています。ダンスに触れたことがないような人たちにも好きになってもらいたい。大竹の小中学校でもやってみたいと思っています」。

大竹を長く離れていても、帰郷すると、気軽に声をかけてくれる人が多いといえます。

「大竹の人ってみんな優しい。家族みたいな感じがします」。

そんな心安らぐふるさとへの恩返しで、応援大使をしてもらっているカンナさんなのかもしれません。



カンナさんが描いた鯉のぼりのストーンアート、市長室に飾っています。

カンナさんのSNS



Instagram
日向カンナ
(踊るカンナ先生)



Travel TV
(動画配信)
日向カンナのやるけん！

写真は昨年11月の『コイ♥こいフェスティバル』のコーナー『日向カンナと踊ろう』のステージ。



2月3日の『バンブーライブ』に7つのグループと1人が出演。

がいないので「歌ってみんな？」と声をかけられたことが、マッキーさんが人前で歌うことに目覚めた一言でした。それが今でも自分にとっての大切な歌だというピーターポール＆マリーの『悲しみのジェットプレーン』という曲。自分と同じようなマリーの声が、長年の封印を解いてくれたと振り返ります。

こうして歌を始めたマッキーさんは、数々のステージを踏むことになり、やがて自分たちだけでなく音楽好きのアマチュアの人たちが、いろいろな人に聴いてもらえる場をつくろうと始めたのが『ミュージック・ジャンボリー』というイベント。この取り組みは、広島県内だけでなく中国・四国地方へと広がり、2010年から2017年まで行われました。こうした人とのつながりがマッキーさんの財産となったようです。

大竹の賑わしを演出

しかし、音楽活動を重ねる中で「大竹から来ました」と言っても誰も知らない。「大竹ってどこ？何があるの？何がいの？」と聞かれても、それをうまく説明できない自分がないといえます。

「私が若い頃は、大竹は臭いまち、公害のまちと言われ、それがすごく嫌でした。大竹に住んでいるというのは言いたくないし、大竹が素晴らしい



好きだと思えば、
まちの見え方も変わってきます。

マッキー（前田満樹）さん
（72歳 大好き大竹応援大使・大竹賑わし集団Oh!バンブー倶楽部代表）

人前で歌えない

マッキーさんこと前田満樹さん（元町）は、毎月第1または第2土曜日の夕方から大竹駅前空き店舗で、『バンブーライブ』という無料の音楽イベントを催しています。2021年からは「大好き大竹応援大使」に登録され、自身がボーカルの活動を通じて、大竹の魅力をPRしてくれています。

マッキーさんの音楽との関わり、それはあまりいい思い出ではなかったと語り始めました。大竹小学校低学年の頃、発表会のためクラスでコーラスの練習をしていたときのことでした。

「私は歌うことが好きだったので張り切って歌ったのですが、先生から『マキさん小さな声で歌って』と言われたんです。私の声がほかの子どもたちと比べて低かったため、フランスが悪くなるため、そんなふうに使われたので、人前で歌うことが嫌いになったんです。」

そんなマッキーさんを驚かせたのが、一人の歌手だったといえます。

東京の美術大学に通っていたときでした。学内のホールでデビューし

しいと思ったことはありませんでした。本当はいいところはいっぱいあったのに、それを知ろうとしなかっただけでした。

三倉岳の麓でコンサートをしたとき「こんなきれいな山があったんだ！と気づき、それで子どもの頃に行った亀居城の花見や夏の蛇喰磬を思い出しました。海も山もある、工場夜景、手書き和紙、手描き鯉のぼりもある。自分が嫌だと思っ

じゃなくて、好きだと思えば、まちの見え方も変わってくるんです。」

生まれたところを遠く離れ、そして再びそこで暮らすことになり、あらためて大竹を見つめ直した。その目を輝かせるマッキーさんは、音楽活動を通じて、大竹の魅力を伝えようと努めています。

市制60周年の市民提案事業の音楽喫茶から始まった『バンブーライブ』は、今年の7月で10年を迎えます。2月3日に行われた83回目のライブも市内外からのグループが出演。ポップス、フォーク、ロック、歌謡曲などバラエティに富んだジャンルの音楽で盛り上がりました。

「コロナ前は入りきらないほどのお客さんが来てくれました。大竹で楽しいところがあれば、広島市からでも来てくれます。」

大竹の賑わしを演出しているマッキーさんをはじめ運営に携わって

たばかりのバンドなどが出演していたとき、ガラガラのだみ声の人が歌っていたそうです。

「今なら個性的だと言われるのでしようが、当時はきれいな声で歌うものだと思っていたので、びっくりしました。こんな声で歌ってもいいんだと」。マッキーさんにカルチャーショックを与えたのが、RCサクセションの忌野清志郎さんでした。

アマチュアに活躍の場を

卒業後、帽子デザイナーとして就職。その後、帰郷し広告会社に入社。結婚し、広島市に住んでいましたが、2008年に親と同居するため大竹に戻ってきました。夫の賢吾さんは長崎出身で大竹に知人はいませんでした。若い頃はロックをやっていたんですが、フォークソングならみんな歌ったりできると『フォークを歌おう』という生涯学習講座を開きました。そこで自分たちのグループを作ったのですが、英語の歌を歌う人



昨年の12月23日、広島市の旧日本銀行広島支店で行われた『クリスマスコンサート』に『メロー・イエロー』が出演。吹き抜けの広い空間内に、マッキーさんの歌声と演奏が響きました。

る『Oh!バンブー倶楽部』の皆さん。ちょっと懐かしい音楽が聴ける『バンブーライブ』に出掛けてみるのはいかがでしょうか。



大竹駅前の元丸山商店2階の『バンブーライブ』は市の公式フェイスブックでも日程をお知らせしています。

大好き大竹応援大使

大竹市の魅力を発信し、応援してくれる方を『大好き大竹応援大使』として登録しています。現在、日向カナナさん、マッキーさんのほか、テレビで活躍中のゴッホ向井さん（お笑い芸人）、ニューヨークで活動中の三宅由利子さん（表現師・女優・ダンサー・歌手・振付師）の4人が登録されています。詳しくは市ホームページをご覧ください。



三宅由利子さん



ゴッホ向井さん



「ボクらは押してるぞ！」
レスキュー戦隊マモルンジャー



ひまわりちゃん

火災予防運動期間中の行事(予定)

火災予防広報

のぼりの設置、ポスターの掲示および消防車による火災予防広報など

立ち入り検査

対象は、市内の多くの人が出入りする建物（一般住宅を除く）や危険物を取り扱う会社など

消防署・消防団合同訓練

と き 3月3日(日)8時から
ところ 御園(新町川)～立戸山(斎場)付近

林野火災を想定した消防訓練を実施します。付近住民の皆さんには、通行やポンプの騒音などで、ご迷惑をおかけしますが、ご理解ご協力をお願いします。

4つの習慣

いのちを守る 10のポイント

〔4つの習慣・6つの対策〕

問い合わせ 消防署 ☎54-0119

6つの対策

- # いのちを守る

10のポイント

〔4つの習慣・6つの対応〕

お問い合わせ 消防署 ☎54-1111

4つの習慣

 - ① 寝たばこは絶対にしない、させない。
 - ② ストープの周りに燃えやすいものを置かない。
 - ③ こんろを使うときは、火のそばを離れない。
 - ④ コンセントはほこりを清掃し、不要なプラグは抜く。

6つの対応

 - ① 火災の発生を防ぐために、ストープやこんろなどは安全装置の付いた機器を使用する。
 - ② 火災の早期発見のために、住宅用火災警報器を定期的に点検し、10年を目安に交換する。
 - ③ 火災の拡大を防ぐために、部屋を整理整頓し、寝具や衣類、カーテンは、防炎品を使用する。
 - ④ 火災を小さいうちに消すために、消火器などを設置し、使い方を確認しておく。
 - ⑤ お年寄りや身体の不自由な方は、避難経路と避難方法を常に確保し、備えておく。
 - ⑥ 防火防災訓練への参加、戸別訪問などにより、地域ぐるみの防火対策を行う。

みんなが推すまち「おおたけ」に

「食」の発信力で推す。

池田 将訓さん（46歳）
日本料理魚池 代表取締役



君はもう覚えたかい 栗谷育ち
のヒノヒカリ 炊き立てはもち
ろん 冷めてもうまい……♪

ちよつと懐かしいベンチアーズ風
サウンドの自称マロンの里のテーマ
曲『あの日ノヒカリ』。作詞作曲し
た松永景道さん（廿日市市）は、
2014年から3年半、転勤で大竹
市に住んでおり、その縁から生まれ
た曲です。仲間と組んだバンドで今
もマロンの里の春・秋のまつりや、
くば漁協で毎月第3土曜日開催の
『おおたけ水産GOGO市』などで
演奏しています。

「知人からマロンの里のまつりで

「ノヒカリ」
「たたハマチtoレモン」を
歌で推す。

松永 景道さん
(54歳 The Give&Presents)



「あたたハマチtoレモン体操」の動画は
こちらのQRコードから。

「魚屋さんでズーっと流れているようなイメージで作りました」と笑います。

陶器で世界的に有名な佐賀県有田町出身の松永さん。

「大竹は海も山もあるし、食べ物もいいし。大竹は故郷の有田と町の成り立ちや人の雰囲気とかどこか近いものを感じます。それに皆さん「大竹なんか」と言いながら、実は地元愛が強いなと思います」。

1 月から始めた『おおたけPR
キャラクターコイちゃん』の利
用受け付け。その申請第1号に名乗
りを上げたのが創業72年の『日本料
理魚池』さん(西栄)です。70周年バ
ジョンだけでなく、135種類(申
請時)のコイちゃんが利用できると
知った池田さんは、興奮気味の様子。
今回見せてくれたのは、仕出し用
の『大好きおおたけ弁当』。かけ紙に
魔法使いコイちゃんがあしらわれて
います。大竹の郷土料理まぜごはん
の『もぶり』や、あたたかマチトレ
モン、栗谷産の米『ヒノヒカリ』で作っ
た米粉クッキーなど、大竹の食材を
使った地元愛あふれる弁当です。そ
の弁当が誕生したのは、市制60周年
だったと池田さんは振り返ります。

「市制60周年のとき、市と市民が
一緒に盛り上げようという機運があ
りました。そのときの『大好きおお

たけ』というキャッチフレーズがまさにこれだということに気が入り、そのまま使ったのが始まりです」。

その年だけの弁当のつもりでしたが、続けてほしいという反響があり、10年を迎えることになりました。

「もふりは、大竹の方は懐かしいと言ってくれたり、県外の方は大竹ってこんな郷土料理があるんだと知るきっかけになったり。やっぱり食というのは発信力があるんだなと」。そう実感した池田さんです。

弁当のほかにも、店では『大好き おおたけ御膳』というメニューも提供しているそうです。また、かけ紙には、コイちゃんだけでなく、『大竹生まれ商品』登録のロゴマークが付けられています。

「料理を使って大竹を盛り上げた
い」。池田さんの思いにコイちゃん
がひと役買えたようです。

「大好きなおたけ」その言葉のように、このまちを推してくれている人たち。しかし、推してくれているのは、この人たちだけではないと思います。そして、市民を始め多くの人に推してもらえる魅力あるまちにしていくなことが何より大切なことでしょう。（広報担当）

※コイちゃんの利用は、市ホームページのトップページをご覧ください。